



TITLE:

京大広報 No. 431

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 431. 京大広報 1992, 431: 333-340

ISSUE DATE:

1992-06-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209221>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 431

京都大学広報委員会



法典に言及されるナヴァ・グラハ（九惑星神）のマンダラ図形

—関連記事本文 337 ページ—

目次

＜大学の動き＞	
ブラウン大学との学術交流……………	334
＜部局の動き＞	
霊長類研究所創立25周年記念式典・祝賀会……………	334
平成4年度文学部博物館春季公開展示……………	335
公開講座 文学部博物館	
「日本地図史への招待」……………	336
部局長の交替等……………	336

日誌……………	336
＜紹介＞	
人文科学研究所 ー共同研究の話題からー……………	337
＜随想＞	
バイカル湖における国際共同研究	
名誉教授 奥田 節夫……………	339
＜コラム＞	
ビッグイズ ビューティフル 三面 鏡子……………	340

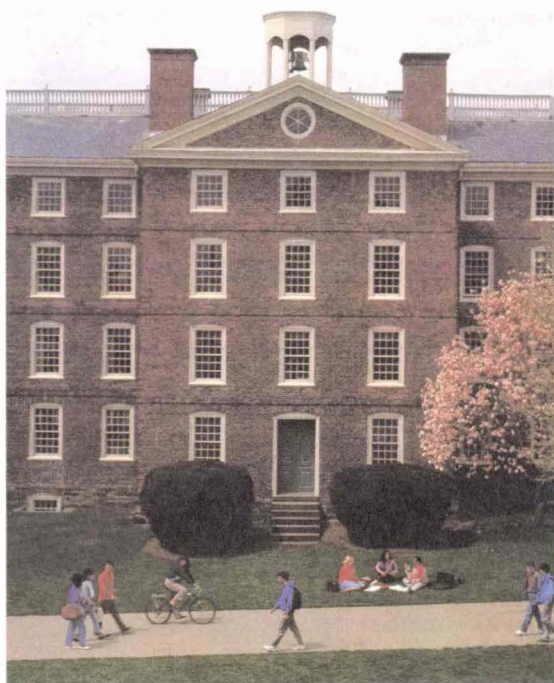
＜大学の動き＞

ブラウン大学との学術交流

本学とアメリカ合衆国のブラウン大学との「学術交流に関する一般的覚書」が、平成4年4月14日に交換された。

ブラウン大学との学術交流の推進については国際交流委員会の答申（関連記事『京大広報』No. 363）に沿って検討が進められ、昭和63年12月の同委員会において協定候補校となった。その後、同大学と数度にわたり協議を重ね、平成3年5月グレゴリアン（V. Gregorien）学長が本学を訪問した際に、学術交流について具体的な話し合いがもたれ、同年7月、本学として「覚書」を締結することが了承された。

ブラウン大学は、アイビー・リーグの一つで1764年に創立された人文・社会科学系及び自然科学系の各分野をもつ大学である。なお教員数は約530人、学部学生は約5,400人、大学院学生は約



1,300人、医学部学生は約300人である。

＜部局の動き＞

霊長類研究所創立25周年 記念式典・祝賀会

本年度に創立25周年を迎えた霊長類研究所は、6月3日（水）午後1時から、愛知県犬山市内の名鉄犬山ホテルにおいて記念式典を催した。

式典は、初めに久保田競所長が「研究所が世界のサル学研究の重要な位置を占めてきたが、今後とも霊長類学の発展に寄与していきたい」と挨拶を行い、つづいて、長谷川善一文部省学術国際局長（代理 竹下典行研究機関課課長補佐）、井村裕夫京都大学総長、丸山和博京都大学大学院理学研究科長（代理 日高敏隆理学部教授）、廣澤一成文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議会長（東京大学医科学研究所長）の祝辞があった。その後、記念講演として霊長類研究所小嶋祥三教授が「霊長類の知能」、杉山幸丸教授が「類人猿の行動」と題する講演を行った。

式典終了後、祝賀会が催され、河合雅雄日本モ



ンキーセンター所長、松山邦夫犬山市長、梶井健一名古屋鉄道株式会社取締役会長の祝辞のあと、野澤 謙日本霊長類学会副会長の発声で乾杯、梅棹忠夫国立民族学博物館長、竹内郁夫岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所長ら、全国各地から出席した100名の関係者が、なごやかに歓談した。

この日、沢田敏男日本学術振興会長、佐藤禎一文部省大臣官房審議官、伊谷純一郎日本霊長類学会長、矢野 暢文部省所轄並びに国立大学附置研

研究所長会議副会長ほか多数の祝電が寄せられた。

なお、25周年関連事業として記念シンポジウムを企画し、「明日の霊長類学」のテーマにより以下の講演が行われた（於 霊長類研究所）。

6月11日（木）

13：00—13：40 霊長類の集団遺伝学の将来（川本 芳，京大霊長研）

13：40—14：20 霊長類の免疫生化学の今後（村山裕一，筑波霊長類センター）

14：20—15：00 霊長類の形態，系統学の展望（小林秀司，京大霊長研）

15：00—15：30 休憩

15：30—16：10 保護管理のための研究発展への期待（大井 徹，農水省森林総研）



16：10—16：50 霊長類の野外研究の展望（丸橋珠樹，武蔵大）

6月12日（金）

10：00—10：40 霊長類の発生生物学の展開（山下晶子，日本大）

10：40—11：20 霊長類の神経科学の発展（沢口俊之，京大霊長研）

11：20—12：00 霊長類の心理学への期待（浅野俊夫，愛知大）

12：00—13：00 休憩

13：00—13：40 OB よりみたサル施設への期待（千葉敏郎，岐阜大）

13：40—14：20 総合討論

（霊長類研究所）

平成4年度文学部博物館春季公開展示

文学部博物館では、6月13日（土）正午で平成4年度春季公開展示を終了した。展示内容，入館者数は次のとおりである。

また、本公開展示にあわせ、5月9日から5月30日までの間4回にわたり土曜日の午後公開講座「日本地図史への招待」を開催した。

期 間	展 示 の 名 称	入 館 者 数				
		一 般	学 生	職 員	特 観 別 覧	計
4/13～6/13	近 世 の 地 図 と 測 量 術	1,406	712	328	438	2,884
	日本古代文化の展開と東アジア					

（特別観覧とは学術研究，視察その他博物館運営研究及び施設見学等である。）



—公開講座—

文学部博物館「日本地図史への招待」

文学部博物館では、平成4年度春季公開展示にあわせ5月9日から5月30日までの間、4回にわたり土曜日の午後1時30分から4時まで、同講義室において第10回公開講座「日本地図史への招待」を開催した。

この講座は一般市民を対象とし、本学教官3名と他大学の近世測量術研究者が講師となり、日本における絵図・地図の作製の歴史と、測量技術の発達、並びにその近代への継承・展開の過程をたどったものであり、62名が受講した。

講義題目、講師は次のとおりであった。

日本図に描かれた異域	文学部	応地利明
国絵図と測量図	文学部	金田章裕
石黒信由の測量術		
	高岡法科大学	楠瀬 勝
伊能図から近代図へ	文学部	山崎孝史
		(文学部)

部 局 長 の 交 替 等

生体医療工学研究センター長

後 義人生体医療工学研究センター長の任期満了に伴い、その後任として谷 嘉明生体医療工学

研究センター教授（生体材料学研究部門担当）が6月8日任命された。任期は平成6年6月7日までである。

日 誌

(1992年5月1日～5月31日)

- | | | | |
|------|--|-----|--|
| 5月1日 | 総長、オックスフォード大学との学術交流に関する打合せ等のため、連合王国を訪問
(10日まで) | 20日 | 京都大学春秋講義 水曜講義 第1日(以後の日程は、27日、6月3日、10日、17日) |
| 8日 | 防火委員会 | ク | 新入留学生歓迎パーティ |
| ク | 平成4年度京都大学職員研修語学研修(英語初級コース)第1日(8月7日まで毎週火・金曜日 総60時間) | 22日 | 放射性同位元素等管理委員会 |
| 9日 | 文学部博物館公開講座 第1日(以後の日程は、16日、23日、30日) | 25日 | 総長、職員組合との交渉に出席 |
| 12日 | 評議会 | 26日 | 大学院審議会 |
| 18日 | 京都大学春秋講義 月曜講義 第1日(以後の日程は、25日、6月1日、8日、15日) | ク | 大学院学位授与式 |
| | | ク | 平成4年度京都大学職員研修主任研修(第一回)(28日まで) |
| | | 27日 | 国際交流委員会 |
| | | ク | 国際交流会館委員会 |

<紹介>

人文科学研究所

—共同研究の話題から—

本研究所の研究者は、それぞれ個人研究のテーマをもって研究に従事するいっぽうで、共同研究に参加している。人文科学研究所の特色をかたちづくり、かつ研究活動の中心をなしているのは共同研究であるといつてよいだろう。共同研究は所内の研究者はもとより、所外からも関係テーマにふさわしい研究者の協力を得て研究班を組織し、所員1名を班長として運営する。研究期間は3年ないし5年で、毎週または隔週に研究会が開かれている。主催者の悩みのひとつは、わが研究所には共同研究班員のための旅費予算がなく、遠方からの参加者も毎回手弁当で来てくださることにある。

共同研究の方法には各研究班の特色があり、テキストの会読、研究発表、討論など様々なスタイルのもとに行われている。その最終成果は研究所の研究報告その他の形で公刊されている。現在

進行中の研究班の数は24の多数に及び、扱われる地域も日本、中国、ヨーロッパ、インドなど、広範囲にわたっている。以下に比較的最近に組織された新しい共同研究班「古典インドの法と社会」（班長・井狩 彌介）を紹介して、共同研究活動の拡がりの一端を紹介したい。

この研究班は、インド文明の構造が確立したと想定される時期に焦点をあてて、古代インド文明の中核となっているヒンドゥーイズムの文化と社会のさまざまな様相を古典インド法典を直接の手掛かりとしながら考察しようという意図で始められた。

「法（ダルマ）」は、インド文明を理解するためにもっとも重要な鍵となる概念である。「ダルマ」の観念は、古典インドはもとより現代に至るまで、インド文明の社会秩序と文化規範の思考の枠組みの基底をなすものとして機能し続けてきた。このような「ダルマ」を中心主題として編纂された文献群が「法典」である。ただし、この研究会では法典を狭義の法律集成として扱うのではなく、いわばヒンドゥー教文化を映す鏡としてみる

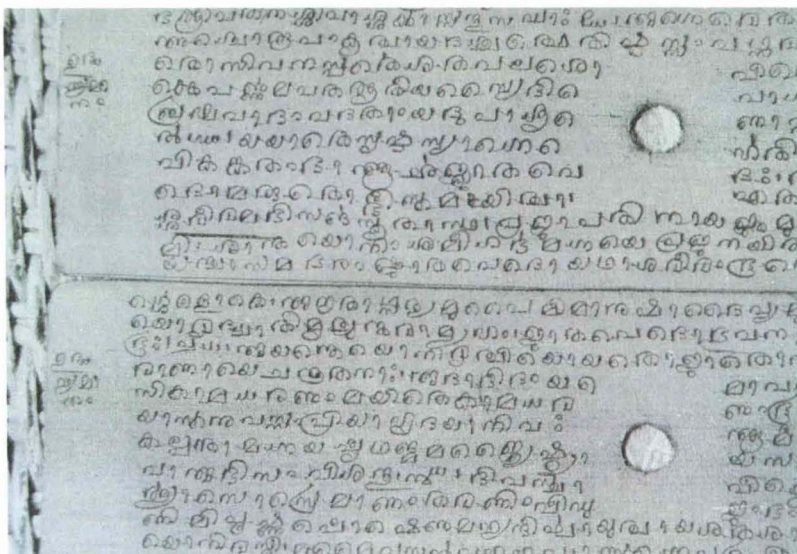


聖典ヴェーダの学習風景（南インド・ケララ州，1990年撮影）

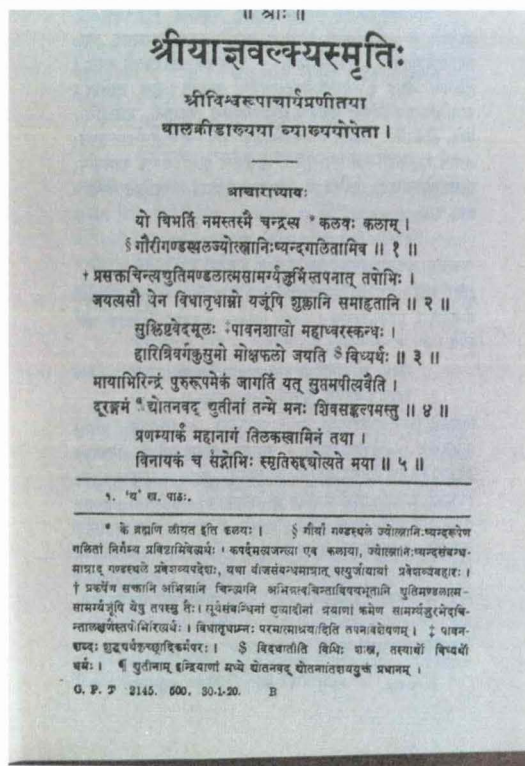
立場を取っている。インド法典は一種の百科辞典ともいべき内容を備えており、その的確な理解のためには法律知識だけではなく、宗教・哲学・祭式儀礼・土着科学など当時の文化のあらゆる側面についての知識が必要となる。このような要請に基づいて、インド学の各分野の研究者の協力を得て共同研究班が組織された。この研究班に協力して集った研究者たちが専門とする分野の拡がり水準の高さは、おそらくインド学の歴史でこれまでにその例を見ないもので、国外からもその成果に関心が寄せられている。また、この研究班の会合では、最新のさまざまな研究情報が寄せられ、情報センターの機能も兼ねるに至っている。

研究会の進行と並行して、古代法典類のデータベース化が進められている。一種の百科辞書の性格を持つインド古代法典の成立と展開を当時の社会と文化の背景のなかで的確に理解しようとすれば、法典類とその周辺を含めた関連文献の膨大な量に及ぶ知識が必要になる。研究資料として重要な主要法典と関係文献を、班員が分担してコンピュータ入力を行い、これをひとつのファイルに集成してデータベースとする。国外の専門学者にもデータ提供の協力を得て、まもなく完成するインド古代法典のデータベースは、世界で初めての画期的なものであり、インド学と東南アジア学などの関係分野で国際的に利用されてゆくことになるだろう。

古代文献を扱う場合にまず大事なことは、用い



南インドのマラーラム文字写本



研究会の会談テキスト

「ヤージュニャヴァルキヤ法典」

られていることばと文体へのこだわりである。研究会が進行するあいだに、文献の写本の検討を通じて、扱う文献の性格についての反省があらためてひとつの課題となってきた。古代インドでは口頭伝承と文字伝承の双方が、いわゆる古典文献の

伝承において並行している。したがって、ある「文献」の今日に及ぶ伝承過程を考える場合には、その「文献」の発展してきた歴史のなかでそれが伝承されてきた地方の発音と書体を見捨てるわけにはゆかない。インドの場合は特に、多言語社会のなかでのリンガ・フランカとしてのサンسكريットの伝承は、インド世界のみならず古代文献の伝承一般を考察するとききわめて興味深い諸問題を提示しているように思われる。

(人文科学研究所)

洛書

1949年11月3日
ドイツ連邦議会は
ボンをベルリン
に代わる暫定首都

とすることを決定した。その42年後、昨年6月20日連邦議会はボンからベルリンに首都機能を移転することを決定した。それからもう一年が経つ。

この間、事は遅々として進んでいない。勿論10～12年計画の大事業だ。しかも旧東ドイツの再建、ベルリンの改造、ボンへの補償と、難題を三つも抱え込んでしまったのだ。目下、連邦政府は東部再建資金の捻出に四苦八苦している。首都移転どころではないのだ。それにもかかわらず、旧西ドイツ人にとっては東ドイツの吸収合併よりも、ベルリンに首都を戻せたことの方が嬉しいことであるらしい。一体、かれらのこのベルリン・コンプレクスは何から来るのか。

近代ヨーロッパの民族国家は国民統合の象徴として競って巨大首都を造り上げた。ロンドンとパ

リ、これがその原型である。プロイセンもエースタライヒと張り合って、ウィーンに代えてベルリンをゲルマンの巨大首都にすべく全力を挙げた。しかし、ベルリンはライヒの首都であるよりもプロイセンの首都であり、名実ともにライヒの首都になったのはやっとなチスの時代を迎えてからである。だから連合国によるライヒ分割は首都ベルリンの分割にまで行ったのであり、ベルリンから首都機能を奪うことでライヒに止めを刺そうとしたのである。それはドイツ人にとって屈辱であったかもしれない。しかし、屈辱がつねに不幸な結果を生むとはかぎらないのだ。

西ドイツはベルリンを失い、その首都機能はいくつもの中都市に分散継承された。報道、航運はハンブルク、宗教と商業はケルン、政治と外交はボン、金融と航空はフランクフルト a. M., 文化と技術はミュンヘン、工業と貿易はデュセルドルフとシュトゥットガルトという風に。ロンドンやパリに匹敵する巨大首都を失った代りに全国に中小都市が均等に分布し、地域

較差の拡大を防いできた。

他方、東ドイツはどうか。分割されたベルリンに燻っていた首都機能を熾すことを余儀なくされた東ドイツは、東ベルリンの肥大化とザクセン諸都市の地盤低下を惹き起してしまった。その結果、忍耐の限度を超えたザクセンからベルリンへの反撃。体制崩壊。国家消滅。ベルリンは蹟きの石でしかなかったのだ。

ベルリンに関わる東西ドイツの対照を顧るだけでも、旧西ドイツ人はもう少し慎重になれたはずだ。とはいえ、ベルリン回帰の願望は解らぬでもない。たしかに、EC 加盟国の首都の中で、人口約28万人に過ぎないボンはルクセンブルク、ブリュセルに次いで下から三番目に小さい。逆に約340万人の人口を擁するベルリンはパリを抜いてロンドンに次ぐ。ドイツの多くの政治家たちが国賓を迎えるに壮麗な巨大首都をもってしえないことに引け目を感じていることは、十分に推察できるというものだ。

三 面 鏡 子

しかし、およそ首都らしからぬボンを自嘲してきたのは西ドイツ人なのであって、イギリス人やフランス人がけなしてきたのではないのだ。外国人はむしろ、フレンスブルクからガルミッシュパルテンキルヘンまで均質な生活水準が実現していることに西ドイツ経済の底力を痛感し、西ヨーロッパ最強の経済大国がかくも慎しい首町に甘んじていることを、かつての民族主義に訣別したことの証しと受けとめてきた。西ドイツは民族国家が分断されても、巨大首都を持たずとも、現代社会が十分に機能することを実証したのである。それは巨大首都建設を即経済発展と錯覚しがちな資本主義的、社会主義的開発独裁に対する暗黙の批判であり、東京への過集中に悩む「強敵」日本に対する痛烈な皮肉でもあった。

しかし、巨大首都願望の禁欲をこれ以上続けることは、ドイツ人にとってやはり無理だったようである。ボンに生まれ育ったエルンスト・F. シューマハー（『Small is Beautiful』の著者）もあと10数年生き存えていたとすれば、“Big is also beautiful”と付け加えたかもしれない。（さんめんきょうし）

ビッグ イズ ビューティフル

